

発表要旨

主権者意識の基礎を育成する小学校社会科授業での実践報告

松野 実(広島文化学園大学大学院教育学研究科)

沖西 啓子(広島市立大芝小学校)

二階堂 年恵(広島文化学園大学)

1.はじめに

主権者教育が叫ばれている現在、小学校第6学年においては選挙の大切な仕組みや選挙権を正しく行使することの大切さについて学習しているが、今後はより具体的な政治事象で実践的な学びを小学校段階でも取り入れていく必要があるだろう。本発表では、現実に子どもたちにとって身近にある政治的課題について主体的に考え討論し判断していく学習活動を通して、主権者意識を育てていく授業の実践報告を行う。

2.授業の展開

広島市内の小学校6年生2クラスを対象とし、各クラスに「小学校の近くに大きな空き地があるとしたら何を作りたいか」という空き地の利用について事前にアンケートをとり、作りたい施設の上位3位についてそれぞれ児童の代表者(広島市長候補者)を立て、3名の演説を聞きながらどれが一番必要なのかを決める授業を開発・実践した。

導入では、各クラスで作りたいという意見の多い施設を確認し、「空き地の利用についての演説を聞きながら、どれが一番必要なのかを決める」という「めあて」を提示した。

展開では、市長候補の児童3名の演説、どの施設を作るべきかのグループでの話し合い、投票・開票を行なった。

終結では、選挙権の年齢が18歳に引き下げられたことや、児童らが選挙権を獲得するまであと6年であること、少数意見だから意味がないのではなく、少数意見だからこそ尊重される部分もあり、これからの政治の動きに少しでも関心を持つように促す等、投票の結果から、勝ち負けの議論に終始することのないように説明した。

3.おわりに

実践授業後のワークシートからは、他の児童の意見を参考に自分の意見を確立している記述をしている児童が多くみられた。演説と投票の間のグループワークにより、他者の意見を尊重しつつ自分の意見を主張するという主権者意識の芽生えがなされたと考えられる。

このように、児童はどのような施設を作るかのグループワークにおいて、互いに自分の考えや意見を出し合ううちに、様々な考え方があるということを知り、それを理解した上でその考え方を受け入れたり、交換したり、自分とは異なる意見でも参考にしたり、少数派の意見も尊重したりしながら、さらに意見を固めることを可能にした。この過程を通して、課題の解決に対して共同して取り組むことの出来る力を育むことが可能になり、小学校段階における主権者教育の醸成といった点における役割は果たせたのではないかと考える。